

「首里古地図」と首里城下町の復原

高 橋 誠 一

一 目 次

- 1 首里城下町の形成
 - (1) 城下町としての首里
 - (2) 首里城下町の形成
- 2 「首里古地図」の作製
 - (1) 東恩納版「首里古地図」の作製
 - (2) 嘉手納版「首里古地図」の作製
- 3 「首里古地図」と首里城下町の再生
 - (1) 田名・吉川版「首里古地図」の作製
 - (2) 首里城下町の復原模型の作製
- 4 「首里古地図」の現地比定と首里城下町の復原
 - (1) 首里市街地に残る城下町景観
 - (2) 「首里古地図」と首里城下町の復原
 - (3) 首里城下町のプラン

1 首里城下町の形成

(1) 城下町としての首里

首里城下町は、一般的には「城下町」という用語で表現されてはいるものの、日本史上での通常の「城下町」とは大きく異なるものであった。一般的な城下町が、城を中心にして侍屋敷、町屋、寺町などが画然と配置されているのに対して、この首里城下町の場合は、いわば士族のみの町と言ってもいいくらいに士分の家宅が多く、首里城近くの当蔵や大中には御殿（ウドゥン）や殿内（トゥンチ）と呼ばれた貴族屋敷が集中してはいるものの防衛線としての配置にはなっていない。また38ある寺院も26%強の10寺院が当蔵にあるとはいうものの防衛の機能をもった配置にはなっていない¹⁾。このような特殊な首里城下町はいかにして建設されたのであろうか。またその実態は如何なるものであったのか。

土本俊和氏によれば、首里城の周辺が都市として大きく改造されたのは尚真王朝（1477-1533）の時代であるが、尚真王の施策は、①職制・位階制の整備、②按司首里集居策、③神女組織の確立、④地方統治の強化、⑤幾多の造営事業の5点にあったとする。これらの動きの中

で、とりわけ首里の都市形態を規定したのは、按司首里集居策と幾多のモニュメントの造営事業であった。特に造営事業のうちで、王家の墓地である玉陵、礼拝所である園比屋武御嶽石門と弁ヶ嶽石門、貯水池である円鑑池と弁財天堂、王家の菩提寺である円覚寺などには、王国の権威の象徴としての建築が、中国と日本の影響を受けながら独自の形を生み出していった琉球文化の原型が見られると土本氏は言う。

首里城の全体の構成を見れば、城それ自体が巨大な船であるかのような印象を与えるが、按司たちはその城の周囲の傾斜地に集められていた。城の東にある弁ヶ嶽から川が城の南側と北側の二手に分かれて西へ流れており、城と川との間の斜面は急である。その地形に沿って張りめぐらされた街路には、格子状の直線道路はみられず、街区の形態も不整形であるとされる。また「首里古地図」を見ても、位階に応じたゾーニングは明確には把握できないことについて、土本氏は、首里へ按司たちを集めた当初からして、位階に応じて居住地を分けることが内地の城下町ほど徹底していなかったのであろうとしている。

なお、城下町であるとはいっても道に面した町屋が町並みを形成していたわけではないと言う。当時の首里の住宅は、ひと昔前の沖縄に多く見られた琉球石灰岩の塀と赤瓦の屋根で外皮を覆った平屋の木造住宅であった。首里以外の集落では番所という役所以外は藁葺屋根であったのに対して、首里は赤瓦の家が集まったという意味で「群れ番所」と称されることが多かった。したがって首里城下町は、他の集落とは景観の上からも明確に区別されるべきいわゆる都市的景観を有していた。言い換えれば、首里は周辺の藁葺屋根の家で形成された農村とは明らかに階層的に優越していたのである。また道路に面した町屋が見られず、各々の屋敷が塀と庭を持った平屋住宅であったという点は、ほとんどが按司屋敷（士族屋敷）のみで構成されている首里城下町ではむしろ当然のことであった。すなわち、日本の城下町における武家屋敷地区との共通性を、指摘できるのである。もっとも首里城下町が、土本氏のいうようにすべてが赤瓦葺きであったのかということになると、若干の疑問は残る。後述するように首里城下町の復原模型の作製においては、必ずしも城下町のすべてが瓦葺きではなかったとされているからである。²⁾

(2) 首里城下町の形成

それはさておき、この首里城下町に関しては、歴史学や歴史地理学からの研究が蓄積されてきた。本稿ではその歴史的詳細について述べることは避け、城下町の形成や都市プランに関する研究の概要を、歴史地理学からの池野茂氏による研究を紹介することからはじめたい。

沖縄本島南部出身の尚巴志が事実上の三山統一をなしとげてその拠点为首里においたのは、

1422年（応永29、永楽20）のことであった。龍潭や安国山などの庭園がこのころに開かれたことが安国山樹下木記碑文（1427）によって明らかであるが、城下町に関する史料は、このころには見られない。

城下町の形成に関する記録が見られるようになるのは、第二尚氏第三代の尚真の時代である。『中山世譜』巻6に、各地の城に拠っている按司による兵乱がやまないで、刀狩りをされた按司が首里に集められたことが記載されている。この点について、宮城栄昌氏は「未成熟ながら、沖縄社会にも封建制度が樹立されていった」ととらえている（宮城栄昌『琉球の歴史』、1977年）。

王国時代の首里は、真和志・南風・西の3つの「平等」に区分されていたが、この平等（フィラ）の起源については東恩納寛惇氏が（東恩納寛惇『南島風土記』、沖縄文化協会、1950年）、「平等は方音フィラ、本来阪の意である。首里は城を中心とする都会で……首里即ち城である。この城に至るに三条の要路があり、一は那覇港より、一は与那原港より、一は牧港より起こっている。」とし、首里城に三所の大門があることもこれによっており、これらの三条の道路から坂によって首里城に達するもので、この坂の上の関門を古来より平等と言ったと述べている。

この点に関して池野氏は、1:2500国土基本図に記載されている等高線及び大正10年測量の1:25000地形図に見られる主要路などから、首里城下町のプランを検討している。それによれば、首里城のやや北部で、西方の那覇港からの道路、北方の牧港からの道路、東南方の与那原港からの道路が交叉していることが明らかである。また首里城は、ほぼ東西方向の尾根筋の130mの高みを利用し、城の北部・東部・南部には100m前後の比較的平坦な部分が広がっている。この平坦部は、西北部では松川の谷、南部では安里川の谷で那覇の低地帯と切り離されており、首里城は山城的な特徴を備えていたと言い得る。このような平坦面の存在は、琉球の他の城跡には見られないことから、尚巴志の王城経営の優秀さが感得できるわけで、首里の俗音のシュイ、ショリ、シホリなどが朝鮮語の京城を意味するとすれば、朝鮮の山城との対比も必要になってくると述べている。

いずれにせよ、尚真によって首里に集められた按司は、その出自によって地域的に分住させられていた。山北系は「北」平等（後の西平等。現在の赤平・汀良・儀保・久場川の各町）、中山系は「南風」平等（現在の桃原・大中・当蔵・鳥小堀・赤田・崎山の各町）、山南系は「真和志」平等（那覇市域の真和志地区ではなく、旧首里区内の真和志・山川・金城・寒川の各町）と推定されているが、このことは明治の廃藩置県の際の旧按司地頭家とされる24家の居住にも合致している。すなわち山北系は国頭郡諸間切、中山系は中頭郡諸間切、山南系は島尻

郡諸間切の按司地頭家と、名称の変更はありながら前記の地区に住み分けていたのである。

もっともこれらの按司屋敷による首里城下町が、尚真時代に一挙に完成したか否かについては不明である。しかし、首里の城下町には日本の城下町において一般的に見られるいわゆる職人町が存在しない。按司屋敷の中には肩書きのない平民とも推定される例もごく部分的には見られるが、ほぼ完全に按司屋敷（士族屋敷）のみによって成立した城下町であったということができる。

琉球王府による按司勢力を知行制によって領地から切り離して首里に集住させた目的は、封建的家臣団への組入れと海外貿易からの隔離であったと池野氏は述べる。この目的に関して言えば、首里城と首里城下町の立地やプランは成功であった。山城的な首里に置かれた政権所在地と家臣団の居住地は、那覇などの外港からは離れており、対外的にも一種の鎖国効果を有していた。幕末期には欧米諸国からの来航がしばしば見られたが、薪水の供給や一時的滞在は外港の那覇において許可しても、首里の門戸は開かれなかった。ペリー艦隊の奥地踏査隊もわずかに首里の外周を垣間見ただけであった。薩摩藩さえも那覇には「御仮屋」と称する政務所をおきはしたものの、対中国政策もあって、首里にはその影響を直接的に及ぼすことはなかった。中国からの冊封使のみが王城の首里に足を踏み入れるにすぎなかったのである。³⁾

2 「首里古地図」の作製

(1) 東恩納版「首里古地図」の作製

首里城下町の研究に際して最も重要な史料としては、「首里古地図」をあげることができる。この地図に関しては、さまざまな研究・紹介がなされているが、ここではまず『沖縄歴史地図』に収録されている嘉手納宗徳氏の解説文をもとにして、その概略を記してみたい。

「首里古地図」の本図の原図は6畳敷大（縦227cm、横330cm）の地図である。戦前まで首里市役所で保管されていた原図は沖縄戦で焼失したが、さいわいにしてその摸図は元の県立図書館と東恩納寛惇氏の所に各1部蔵されていた。そのうち図書館のものは沖縄戦で焼失したものの、東恩納氏蔵の地図は残り、現県立図書館の東恩納文庫に蔵されている。『南島風土記』（1950年）によると、東恩納氏は1910年（明治43）夏、絵師の具志氏に嘱して摸本を作らせ、自ら校訂してできたものだという。原図が焼失した今日、専門家により作成されたこの摸図は文化財として認定してよいものと嘉手納氏も評価している。

ところがこの古地図の作製年代については従来から諸説があった。その主要なものは真境名延興氏と東恩納寛惇氏の論争であった。真境名氏は、首里町端の南市場があること（開設、正徳5年、1715）および佐敷御殿がないこと（享保17年、1732）から1715年以後、1732年以前に

地図が作製されたとした。この2点に加えて傍証として、延宝2年(1674)建造の安国寺、元禄10年(1697)の天界寺井戸、元文元年(1736)に取り払われた開得大君御殿の東西南民屋、安享1年(1744)に移転した円覚寺鐘楼放生池がこの古地図に記載されていることがあげられた。また反対に、延享元年(1744)に塗られた首里城壇砂灰塗の形がないこと、寛延元年(1748)に建設された玉陵番所がないこと、宝暦3年(1753)に創建された城中寝廟や城中世添殿がないことも傍証としてあげられる。さらに尚敬王(在位1713~1751)の姉妹は皆「あむしられ」の屋敷名と一致すること、人名の表現が古式であること、また元文2年(1737)に建設された観音堂左右の廊屋が描かれているなどの図面の錯誤も認められることなどをあげている。加えて真境名氏は、首里城下町の戸数と人口について、古地図(18世紀初期)当時は、戸数1154、人口約15000、1戸当たり13人(推定)であったのに対して、文化13年(1815)には1497戸、38683人、25人、さらに明治10年(1877)には3456戸、44886人、13人というように変化していったと述べている。

これに対して、東恩納氏は、首里町の創設、蔡温の邸宅がないこと、同楽苑、平敷屋の邸宅、建善寺の再建、使用されている用字などを根拠にして、古地図の作製年代は、尚貞王末より尚益王にかけてであるとしたのである。

これらの研究を踏まえて、嘉手納氏は、元の図の作製は18世紀初になされたが、その後、19世紀中葉に再作製されたものと推定されている。すなわち、毛姓上里家9世稲福親雲上盛時の年譜によると彼は1704年(宝永元)に絵図指図奉行となったが、1707年に別の職に転じているから、この地図は1704~1707年の間に作製されたことになる。この図の作製の数年前に江戸幕府から全国の各藩に対して地図の作製提出を命じているので、その一環として作製されたものであろうとの推定とも符号する。ところが、この地図には、18世紀初頭よりも以降の要素が数多く記載されている。このことから「首里古地図」の作製年代についての疑問が生じていたわけである。しかし、「秋姓家譜」には1850年(嘉永3)に9世の柴俊が絵図書調方筆者としてこの地図を再調整したことが記載されている。この時、地図の損傷が著しく開いて見ることさえも困難な状態であり、そのため原図をそのまま写すことは不可能であった。そこで屋敷図帳や山敷図帳を参照し各当事者の意見を聴取するなどの丹念な調査照会をすることによってようやく完成することができた。このことから嘉手納氏は、この地図は1704~1707年のころに作製され、1850年に再作製されたとの結論に達したわけである⁴⁾。

(2) 嘉手納版「首里古地図」の作製

ところがこの再作製された東恩納版と呼ばれる「首里古地図」そのものは前記のように6疊

大という大型のもので、しかも折れ目の所に傷みが目立っている。閲覧するためにはそのつど開いたり畳んだりしなければならず保存の点でも問題が多い。そこで1968年（昭和43）に嘉手納氏が縮小模写したものが、一般に流布、使用されている。この地図を先の東恩納版「首里古地図」に対して、嘉手納版「首里古地図」（縦76cm、横110cm）と称している。

この縮図作製の手法と縮図の限界については、嘉手納氏自身、「カメラを使ったり専門家を呼んだりして種々試みたが、いずれも成功しなかった。最後に残されたのは、自らの目測手法による縮図の作製であった。まず折目に合せて3分の1の枠を作り、各枠単位で3分の1の縮図を描き、後で前後左右の枠を調整して作り上げた。1968年（昭和43）5月のことである。この古地図の正確さは当時の測量技術の高さを示すものといわれているが、原図を1分1間に縮写して作製された縮図は折れ目で生じた枠単位に作製したために、各屋敷その他の面積に誤差を生じている。ただ各事物の位置はほぼ正確に示してある。したがってこの縮図は各屋敷の図積を詮索する上からは価値はないが、その図に盛られた事項とその位置などから歴史的事実を引き出して調査研究する点では参考にすることができるはずである。」と述べている。

このような手法で縮小・復元された嘉手納版「首里古地図」の内容について、嘉手納氏が指摘した事項は以下の如くである。

・地形・道路は、戦前のそれとほとんど変りがない。現在でも部分的には完全に存していて往時を偲ぶことができる。

・全管内の家屋敷が細大もろさず記載されていて、各階層の動態が一目瞭然、1戸平均人口から管内の全人口も算出できる。また医者⁵⁾の居住についても具体的にわかる。

・『球陽』などに記載された事項についても図中でその実在を知ることができる。弁財天女堂、金城嶽拜殿、世持橋、免津良拜殿、禁城北の道路、安国寺の移転、製紙業などがそれで、特に製紙の場合、水との関係が図によって明瞭である。

首里は沖縄戦で徹底的に破壊されたが、それでもその旧跡や敷地の残存度はかなり高い。これらの旧跡を、この図によって確認する時、かつての首里城下町が生き生きと蘇るといふ熱い思いが、この縮図に立ち込めているように感じられる。

3 「首里古地図」と首里城下町の再生

(1) 田名・吉川版「首里古地図」の作製

しかし、嘉手納版「首里古地図」には欠点もごく一部ながら見られる。それは嘉手納氏自身によって指摘されているように「この縮図は、各屋敷の図積を詮索する上からは一文の価値も認められない」という縮尺上の問題、手書きによったことによる記入漏と誤記である。そこで

吉川博也氏は、嘉手納宗徳氏の労を多としながらも、新たに「首里古地図」の作製を試みた。その際に使用されたのは、東恩納版「首里古地図」であり、目的としては、①ハンディな利用しやすい縮小版にする、②地図に記入されている草書体を楷書体活字体に改めて、読みやすくする、③屋敷地の住人の呼称（位階）を記号化し、分析しやすくする、④個人的屋敷地以外の場所については注で説明を加え、専門家以外にも理解できるようにする、ということであった。

具体的には、県立図書館に保存されている東恩納版「首里古地図」を18分割した写真フィルムを利用して、18枚の写真を張り合わせて縮小版をつくり、屋敷地の区画の線の部分がトレースされた。この各屋敷地の区画に、村別に番号を付して索引図が作製されて、この区画に番号が付された。さらに地図の草書体の字に関しては、那覇市役所企画部振興課の田名真之氏の協力によって活字体化がなされている。「田名・吉川版」首里古地図の完成は1987年5月、県立図書館から写真を入手してから1年10ヶ月を経過したという⁶⁾。

この「田名・吉川版」首里古地図の完成は、首里城下町研究において、まさに画期的なことであったと言ってよい。しかも吉川氏は、単に古地図の作製にとどまらず、この古地図を多方面から詳細に分析・検討することによって、従来看過されてきた首里と那覇の空間構造をダイナミックに浮かび上がらせていった。

まず古琉球の都市空間として、石灰岩台地上の政治都市・首里と港湾の港都・那覇という基本型があげられる。このうち「首里台地」に立地している首里は、御嶽の分布と周辺の地形からして、沖縄の伝統的な集落の存在として位置づけられる。すなわち仲松弥秀氏の述べる「多くの場合は村の背後、それも沖縄の村は丘の斜面に立地しているものが多いことから、その背後丘上にこの御嶽が存在していることが多い」などの指摘に相当すると考えられたわけである。要するに、「首里は在来の複数の集落に重なり連合するようにして、かつ東端に位置する弁ヶ嶽を御嶽とし、西に海を置くという、いわばそれ自体が巨大な腰当森の集落を形成するという二重構造になっている。このように見るとスケールの差こそあれ、この首里も基本的には沖縄の伝統的な集落形態を備えたものであることが理解できる。」とするのである。ここでいう複数の集落の連合とは、古地図に見られる街路パターンに認められる多核的な都市形態に通じるものであり、しかもその多核的な都市構造は石灰岩台地の地形に立地することによる木の分布に由来するという新鮮な見解が述べられている。

さらに吉川氏は、古地図に見られる呼称や位階制度を分析することによって、首里の社会秩序空間に説き及ぶ。それによれば、位階による明確な社会秩序空間は見出し得ない。

また従来の「首里古地図」は明らかに何らかの実測に基づいて作成されたものであるが、旧

那覇から王城へと向かう綾門大通りと中山門、守礼門という王城へのアプローチは過大表示がされており、象徴的に描かれているなどの点から、「聖と俗」をつなぐ「意味象徴空間」が意識されていて、ここに見られる「聖なる首里と俗なる那覇」という分別は、単に政治・宗教と港湾・貿易という機能的分担関係を超えるものであった。その点からすれば、首里城はまさに「小宇宙としての首里城」と位置づけられるべきものである。

『琉球国由来記』巻4の風水の項や『唐栄旧記全集』の記述によれば、17世紀には琉球に風水地理が伝来していたことがわかるが、吉川氏は『球陽』巻之十の1713年の記事に「首里城は竜脈のあつまる所で甚だ好ましい場所である。…城の前方（西）を望むと馬齒山（慶良間列島）が海中より起り、これによって気が漏れることを防いでいる。左（南）に位置する小禄、豊見城の山々を青竜、右（北）に位置する北谷、読谷山を白虎とみなすことができ…」とあることから、玄武としての弁ヶ嶽、青竜としての雨乞嶽もしくはその付近の急崖や河川、白虎としての虎頭山、朱雀としての那覇を想定し、その後の整備によって首里城は風水思想にもとづいて作られはしなかったかもしれないが、少なくともそれによって読みかえられた、つまり同じ世界を風水思想という他の文脈に読みかえることによって、新しい輝きを持つ断面を誘発することができる⁷⁾と論述している。

以上、吉川氏による「田名・吉川版」首里古地図の作製と、それによる研究は、首里と那覇の空間構造にきわめて新鮮な光を照射した輝かしい業績として高く評価すべきものである。

（2） 首里城下町の復原模型の作製

前記の「田名・吉川版」首里古地図の作製は、首里城下町研究の上で、まさに歴史的といえるほどの貴重な実りをもたらしたものであった。一方、絵図もしくは地図の形式をとるものではないが、首里城下町に関しては、きわめて優れた復原模型が作製され、首里杜館に展示されている。首里城公園の模型は以前からあったが、それに加えて首里城下町全体に及ぶ復原模型が、1998年に完成したわけである。この復原模型は、株式会社「国建」地域計画部部長の福島清氏を中心とし、那覇市役所歴史資料室の田名真之氏や外間政明氏などによって綿密な検討が行われた結果、その完成にまでこぎつけられたものである。

復原模型の作製については、福島氏らによる研究会資料「首里古地図」と町並み（1997年10月9日）に詳しい。この研究資料は、単に作製のための資料という枠にとどまらず、首里城下町の実態を把握する上で非常に大きな意義を持つものである。ただ正式に公刊されたものではないので、以下、福島氏の了解を得て、この研究資料を骨子として、復原模型の作製過程を追うことにしたい。⁸⁾

すなわちまず、「首里古地図」についての作製をめぐる研究史を追跡したのち、「首里古地図」に記載されている内容が抽出・検討されていった。その結果、寺院、神女・御嶽、その他の各村ごとの主要施設として、下儀保村…儀保川、御墓、上儀保村…西来院、御待所、赤平村…法龍寺、今帰仁按司乳母あむしられ、窯屋（籠屋:宮女の米飯を調理した所）、久場川村…嘉手苳あむしられ、越来御殿あむしられ、諸見里御殿あむしられ、平等所、中城御殿御菜園所、行脚屋敷、山川村…与那城按司あむしられ、美里御殿あむしられ、内原御殿あむしられ、古波津按司あむしられ、当真御殿あむしられ、紙漉所、桃原村…儀間あむしられ、高安あむしられ、大中村…聞得大君御殿、大里御殿あむしられ、屋我之あむしられ、国場御殿あむしられ、中里大御嶽、中里小御嶽、アタニ川、当蔵村…円覚寺、天王寺、興禅寺、廣徳寺、弁財天堂、御高所、伍德院、松岳院、仙江院、堪道西堂、中城御殿玉城あむしられ、中城御殿大里ノあむしられ、北谷御殿あむしられ、大里按司あむしられ、アダン川御嶽、あかす森御嶽、国中城御嶽、蓮小堀、汀志良次村…報恩寺、桃昌院、彼岸軒、修竹院、龍福庵、聞得大君御殿、儀保大あむしられ、野嵩御殿越来あむしられ、おもと御嶽、大鈍川村…安里あむしられ、真壁あむしられ、高嶺按司あむしられ、與那覇堂村…慈眼院、普門院、来光院、観音堂、真和志村…浦添按司あむしられ、中城御殿、大美御殿、かぢ木植所、石粉所、御細工所、町端村…園比屋武御嶽、（天山）墓、鍛冶奉行所、魚小堀、町、立岸村…中城御殿あむしられ、識名御殿あむしられ、寒水川村…安国寺、免津良嶽、御客屋、樋川、金城村…天界寺、見上森御嶽、諸見里御殿あむしられ、霊御殿、墓地、大樋川、中ノ川、内金城村…大日寺、大慈院、御嶽1、御嶽2、拝殿、富あむしられ、崎山村…御茶屋、建善寺、越来御殿あむしられ、真壁御殿あむしられ1、真壁御殿あむしられ2、赤田村…臥雲軒、慈雲庵、牟尼庵、松沙庵、首里ノ大あむしられ、南風の作事のあむしられ、御待所、鳥小堀村…慈照庵、福寿庵、智福院、浄聖庵、弁ノ大嶽、弁ノ小嶽、瓦窯が「首里古地図」に記載されていることが確認された。

「首里古地図」には、屋敷地については各戸ごとにその名称が記載されている。その名称と身分は、御殿、按司、親方、親雲上（親上・親雲）、里主、（以上は島持、領地）、里之子親雲上（筑親上）、筑登之親雲上（筑親雲）、掟親上（掟親雲上）、里之子、筑登之、子、（以上は士族、次の仁屋を士族に含む場合もある）、仁屋（子や）、男・女、百姓、（以上は百姓）、大あむしられ、あむしられ（以上は神女）である。

なお姓のみが記載されている例も多く、それらは医者（休博、侍易、道味、休仁、休意、休達など）、御茶道（立意、湧川、津覇など）、旧役職関係者（前仲田筑登之親雲上真三良、前富名腰親方後家など）、現職の子など（仲田親方六男真牛、崎山筑登之親雲上小樽など）、男（男かまど、男とくなど）である。

記載されている諸施設を分類すれば、寺（法龍寺，天王寺，興禅寺，廣徳寺，円覚寺，報恩寺，安国寺，天界寺，大日寺，建善寺），堂（弁財天堂，堪道西堂），院（西来院，仙江院，伍徳院，松岳院，桃昌院，大慈院，智福院，修竹院），庵（龍福庵，松沙庵，慈雲庵，牟尼庵，浄聖庵，慈昭庵，福寿庵），軒（彼岸軒，臥雲軒），所（御待所，平等所，紙漉所，中城御殿御菜園所，かぢ木植所，石粉所，御細工所，鍛冶奉行所），その他（養蔵主，窯屋，行脚屋敷，御客屋，拜殿）となる。

さらに寺院はその系列によって，天王寺末寺…安国寺，慈眼院，大悲（慈）院，普門院，慈照庵，寿福寺，天王寺末寺…龍福寺，建善寺，仙江院，蓮華院，広徳寺，伍徳寺，知福院，桃昌院，玉龍庵，天慶院，以上の2系列と，1475年に浦添村に移建され天徳山龍福寺と改められた極楽寺がある。

ついで，余地として平等所余地，池城親方余地，古波津按司余地，高原親雲上余地，具志頭余地，大山同余地，田場親方余地，真壁御殿余地，佐南親雲上余地，豊見城按司余地，前聞得大君御殿御余地（3），読谷山御殿御余地（2），御余地，余地，浦添御殿余地，東風平按司余地，大古廻親方余地，豊見城余地が記載されている。

前記の身分ごとの数値は，研究資料では村別に分別されているが，本稿では城下町全体の数値を記すにとどめたい。御殿6，按司27，親方39，親雲上234，里主2，里之子親雲上41，筑登之親雲上204，掟親上18，里之子16，筑登之134，子59，仁屋（子や）112，男・女65，百姓4，姓のみ116，大あむしられ2，あむしられ29であり，合計1108戸（ただし「田名・吉川版首里古地図」の屋敷番号では，1194戸）ということになる。

「首里古地図」に描かれている施設や屋敷の概要は以上の如くであるが，敷地や家屋については制限があったことも，1737年の史料によって判明している。すなわち家格によって，その地敷（一辺の長さ）と建物（一室当たりの畳数）には規制があった。総地頭家（王子・按司家）の場合は15～16間（27.3～29.1m），22.5畳以下，脇地頭家は12～13間（21.8～23.6m），16畳以下，平士は10間（18.2m），8畳以下，百姓（平民）は9間（16.3m），6畳以下，田舎百姓は9間（16.3m）で主屋は3×4間，台所は2×3間というようにその規模が決められていた。なおここで言う1間は6尺として計算されているが，坂本磐雄氏の「沖繩の集落景観」では1間を6.5尺としている。

それでは以前の首里の様相はどのようなものであったのか。研究資料では，『南島風土記』に見る首里を，次のように略述する。

古の首里は真和志，南風原，西原の3間切にまたがる厩大なものであったが，向象賢時代にこれを整理し20（？）ヶ村をもって，真和志平等（5村）…真和志，町端，山川，金城，寒水

川、南風平等（6村）…桃原、大中、当蔵、鳥小堀、赤田、崎山、西平等（4村）…汀志良次、赤平、儀保、久場川の三平等に分治するようになった。この三平等の起源は明確ではないが「中山世鑑」（1650）に始見されているという。さらに、畿内の中から京都を区画したのと同様に、三山の按司部を首里三平等に分置した。しかし「首里古地図」によれば、三山と三平等とは何の関係もない。ここで言う平等とは前述したように、「フィラ」で本来坂のことで、首里は坂のある三条の道路を以て、三脚台の頂点に鎮座して三港（那覇港、与那原港、牧港）を俯瞰する所であった。

この首里は、明治から大正にかけての時期に、行政面で大きな変化を遂げていった。明治13年8月には、三平等役場を廃し、真和志、金城、赤田、汀志良次、赤平、当蔵、桃原の7管区とし、且つ区画の廃合を行い、大鈍川、与那覇堂、立岸を山川に合し、内金城を金城に合し、上下儀保を合して儀保とし、全管15ヶ村とした。これを真和志村役場（山川（+大鈍川、与那覇堂、立岸）、真和志、町端）、金城村役場（金城（+内金城）、寒水川）、赤田村役場（赤田、崎山）、汀志良次村役場（汀志良次、久場川）、赤平村役場（赤平、儀保（上・下儀保））、当蔵村役場（当蔵、鳥小堀）、桃原村役場（桃原、大中）の7村役場に分治し、最初の間は大美御殿内で事務を執っていた。

さらに明治29年4月には、区制実施とともに首里区とし、従来の村を字と改め、明治39年10月には、西原間切平良村の内平良及び前原の一部、石嶺村の内字久場川、前原、汀志良次、弁ヶ岳の各一部、南風原間切新川村の内字赤松、髪川、大門、伊部志川原の一部、すなわち全戸数約400、人口約2000人を編入した。

また大正3年5月には、従来の字を改めて町とし、同時にその名称特に称呼を改正し区画にも大修正が加えられたが、この際、多くの地名の原意が逸することになった。ついで大正9年、市制実施の準備として第2次の拡張が実施されたが、それは西原村のうち石嶺及び末吉の両字の編入、末吉字の大名原を分立して大名町としたもので、戸数は約300、人口約3000人の増加という結果となった。このような過程を経て、大正10年5月20日、初めて市政が施行され首里市（19町）が成立したわけである。

ついで研究資料では、『市政十周年記念誌』による廃藩直後在住の世家の120戸が、その王子家、按司地頭家、絵地頭家、脇地頭家という位階ごとの所在が記され、さらに前述したような真境名安興氏と東恩名寛惇氏の「首里古地図」の成立に関する論争がたどられる。

福島氏らによって、このように「首里古地図」の綿密な分析と、その後の首里の変遷がカバーされたわけであるが、現実に復原模型を作製するとなれば、実際にどのような家屋や町並みが展開していたのかを突き止めねばならない。そのために、引き続いて、当時の景観を描き出

すために、近世の冊封記録に記載された首里城下町の町並み景観が調査された。その概略は以下の如くである。

①『中山伝信録』（1719年の記録）による首里の町並み

家屋…家を造るときは、海の風を避けるためそれほど高くしない。多くは木造家屋であるが、湿気を避けるため、地面から必ず3、4尺高くする。寄棟造が多く、瓦は中国の牡瓦（まがわら）に似ており、非常に堅固である。また煉瓦壁はなく、板をはめて壁面としているが、板壁は上等で、茅壁や竹壁、クバの葉を竹の間に挟んだものなどが多かった。戸は上下に2本の溝を彫り、それに扉をはめこみ、左右に滑らして開閉し、室内は藁床に厚さ1寸ほどの畳表をかぶせ、縁は青い布をつけて、部屋いっばいに敷きつめていた。したがって王宮から民間まで部屋に入るときは草履をぬいでいた。那覇の家屋は、みな民間のものであるが、このうち首里で見られる家屋は、役人や貴族の大きい家で、石垣や棟も立派なものである。しかし、1列に家を作り、内外を分かっただけで、2階建てや複雑な構造のものはない。首里の大家はすべて檜木（ちゃあぎい）で家を作り、板の間や廊下にも張る。長年ふきこむと、つやがでて顔がうつるほどである。たいていの家は横に軒をつけており、東か西の庭に向かっている。そこには小山や庭石や庭木を配している。

倉庫…米を収納する高倉は地面から4、5尺も高くしてあって、遠くから見るとまるで草葺きのあづまやである。高倉の下には16本の柱があり、柱の間の空間は人が通ることができ、上に木造の部屋が作られている。官倉もすべて同様である。村民は数軒よって高倉一つを作り、そこへ米を収納し、当番制で番をする。

屋敷囲い…庭をとりまく垣や家の周囲の垣は、切り石を積み上げてつくられていた。ちなみに農家の屋敷囲いに石垣は許されなかった。首里の大家の外まわりの石垣は、磨き削り、各面が切り取ったようになっており、きわめて堅固で美しい。

道路…村の道はみな大層ゆったりとして清らかである。多くの家は細葉の小竹を編んで、まがきを作っている。

②「琉球国志略」（1756年の記録）による首里の町並み

家屋…地面の湿気を避けるために、必ず地上から2、3尺上げてある。門や窓には戸板がなく、上下の限（敷・鴨居）もみな、2本の溝道を刻り門扇（しょうじ）を設け、門扇中には格子に作り、紙で糊づけし、左右に引いて開けたり閉めたりする。外側と仕切るために板門（あまど）を設け、一カ所に畳み重ねてある。閉めるときには次から次へと末の戸までいって閉まる。室内の床板の上には貴賤と無く、すべて脚踏（たたみ）が敷いてある。住居には煉瓦塀は無く、ただ、海涯の砥石で石垣にしてある。貴家の石垣は平らかに削磨してある。屋上や門前

には瓦獅子を安置してあるのが多く、また、片石を立て「石敢当」と刻んである。軒は、東か西に向かって開いているものが多い。庭には、小山石を設け、各種の樹木を植えている。

屋敷囲い…石の上には蘇鉄を植え、塙（石塙）の上には慎火草（べんけいそう）を密に植えてある。

道路…村の道は全てが極めて広く、清潔で、細葉の小竹を編み、また、十里香（げっきつ）を列べて植え、屏籬としたものも多く、時々、剪剔し、方平に、等しく整えられている。久米が最も盛んで、中山八景の一となっている。

近世当時の記録からうかがえる首里城下町の町並みや家屋は、以上のようなものであったが、福島氏らの考察は、さらに『小湾字誌』を中心資料として、古集落の村落調査にまで及ぶ。その結果、次のようなことも判明している。

道幅…主要道路（中道）は、備瀬では7尺強以上、小湾では9尺であった。ただし、綱引きを行き道は12～15尺、荷馬車がすれ違う待ち場は10尺という幅員をもっていた。また筋道（スージ）は6尺程度でやや細かったが、これも2～5～8尺という相違がある。

敷地…敷地の形は整形（方形）のものが7割（縦長27、横長21、正方23%）で、不整形のものは3割程度であった。家屋は敷地が縦長の場合、北側に南向きのフルのものが71%、敷地が横長の場合は、北側に家屋が寄り、フルは西側に東向きのものが54%、敷地が正方の時には、フルの向きは東と南ほぼ同数（45:42%）であった。さらに先述の大きさの制限はあまり守られず90%が制限令以上の大きさであった。なお道から敷地へのアプローチは直接が87%、他は間接アプローチであった。出入口は渡名喜島では南71%、西14%、北6%、東9%であった。

屋敷囲い…石垣は四周囲いのものが55%、三方囲いが24%（渡名喜島の場合は四周79%、三方16%）。石垣は植物を伴うものが94%で（足下を石垣、樹木が上空）、屋敷林はガジュマル、ミカン、ユウナ、マーギ、ギジチャー、フクギ、桑の木などである。また石材は野石・山石（最も多い）、栗石、珊瑚石灰岩、琉球石灰岩などで、野面、布、あいかた、たて積み（栗石板状）が多く見られる。

建物…主屋の向きはほとんどが南南西で、建物位置は中央4割以上、東寄り3割、北寄り1.6割、西寄りのものはほとんど存在しない。住居の型は二棟造り型（トウナガー+ウフヤーが最も一般的で56%、一室一棟型（1LDKタイプ）24%、掛け造り型（二棟造り平面で屋根は一体）が7%、多室一棟型（炊事場合む主屋が完全に一体化、瓦屋根）が13%であった。屋根に関しては、瓦と茅や竹葺きの併存はなく、瓦葺きは全体の2割に満たない。屋根勾配は茅・竹葺きの場合は矩勾配から更にきつい勾配で、竹葺きの竹は山原竹の穂を使い、丈夫で高

価なものであった。またフルについては、2連式が一般的だが、3連、5連式もあり（渡名喜島）、その位置は屋敷北西が最も多く（70%）、その他も北西隅が中心である。アタイは主屋の西側か北側が一般的で、比較的日当たりが良く、上座から離れた位置にあった。

以上のような検討によって、首里城下町の家屋や町並みの景観が類推されるわけであるが、その首里から発する近世の首里の街道についても、18世紀前半までに、首里城を起点とした放射線状の公道網が、海上を含めて整備されていったと考えられる。「琉球国絵図」（内閣文庫・元禄期）、「国中一統図」（県立図書館・1871）に描かれた、真珠道…石門（起点、真珠湊碑・国王頒得碑）～島添ヒラ（シマシーヒラ）～金城町石畳～金城第樋川（フィージャーガー）～金城橋（重修金城橋碑）～識名坂、島尻方西海道…久慶門～守礼門～綾門大道～中山門～茶湯崎橋～安里橋～長虹堤～渡瀬～儀間村、島尻方東海道…継世門～崎山馬場～下川原橋（シチャーラ）～ウフジョービラ、国頭・中頭方西海道…久慶門（起点）～龍淵橋～松崎馬場（龍蹊）～当蔵カジマヤ（十字路）～安谷川御嶽～平良橋、国頭・中頭方東海道…歡会門～円覚寺南側～天王寺東側～読谷山御殿西側～久場川坂（ビラ）が、主要な5街道であって、これもまた復原模型の作製に際して採用されることになった。

以上のような綿密な研究と検討を繰り返すことによって完成した「首里城下町の復原模型」が、きわめて高い学問的な価値を有していることは言うまでもない。城下町における道路・諸施設・家屋・屋敷囲いあるいは水田・島・林など、復原模型によって首里の城下町は見事に蘇ったと言ってよい。類似の復原模型は全国の博物館に多く展示されているが、その中でも白眉のものであると表現して決して過言ではないであろう。

ただ、福島氏による教示によれば、この復原模型は、あくまでも前記の東恩納版「首里古地図」、嘉手納版「首里古地図」、田名・吉川版「首里古地図」をベースとして作製されたものであるという。現行の1:10000地形図や1:2500都市計画図は、標高などの面で参考にされたものの、それら大縮尺の地図上に道路や地筆を復原し、その上に上記の家屋などが展開されていったものではない。このことは復原模型の価値を減ずるものではなく、ごくわずかな瑕疵でしかない。しかし、地理学という立場からすれば、現実の地表面と比較した場合の水平的分布の歪みは、やはり気にかかるのである。

4 「首里古地図」の現地比定と首里城下町の復原

(1) 首里市街地に残る城下町景観

先に述べたように、東恩納版「首里古地図」と嘉手納版「首里古地図」は、ともに今や文化財と言ってもいいくらいの価値を有している。また、新しく作製された「田名・吉川版」首里



1-1



1-2



1-3



1-4



1-5



1-6



1-7



1-8



1-9



1-10



1-11



1-12



1-13



1-14



1-15



1-16



1-17



1-18



1-19



1-20



1-21



1-22



1-23



1-24



1-25



1-26



1-27



1-28



1-29



1-30



1-31



1-32



1-33



1-34



1-35



1-36



1-37



1-38



1-39



1-40



1-41

写真1-1～41 首里城西南部・西部の古道



2-1



2-2



2-3



2-4



2-5



2-6



2-7



2-8



2-9



2-10



2-11



2-12



2-13



2-14



2-15



2-16



2-17



2-18



2-19



2-20



2-21



2-22



2-23



2-24



2-25



2-26



2-27



2-28



2-29



2-30

写真2-1~30 首里城東部の古道



3-1



3-2



3-3



3-4



3-5



3-6



3-7



3-8



3-9



3-10



3-11



3-12



3-13



3-14



3-15



3-16



3-17



3-18



3-19



3-20



3-21



3-22

写真3-1~22 首里城北部の古道

古地図と首里城下町の復原模型によって、首里城下町に関する研究が格段に進んだことも言うまでもない。これらの全てに対して、深甚なる敬意を表したい。

とは言え、先述したように、これら4種類の首里城下町を表現した古地図や復原模型に、若干ながらも欠点のあることは否定できない。それは東恩納版「首里古地図」がかなり正確な実測によっているとはいえ、現在の測量技術と比較すれば当然のことながら精度の点でどうしても劣っていることに帰せられるのである。後3者にしても主要なベースとされたものが東恩納版「首里古地図」であった以上、やはり測量上の誤差という桎梏から脱することはできなかったと言わざるを得ない。

そこで筆者は、これら先達による貴重な資料を可能な限り現実の首里市街地の上に投影したいと考えた。より具体的に言えば、現行の大縮尺の地図の上に首里城下町のプランを比定・復原することを目指したわけである。

その作業にかかる前に、はたして現在の首里市街地には、どれほどの城下町当時の歴史的景観が残存しているのであろうか。戦争による沖縄の被害は、こと改めて言うまでもない。首里の城下町地区においてもほとんどの文化財が失われてしまったことは、すでに周知の事実なのである。

このことを探る準備段階として、嘉手納版「首里古地図」や「田名・吉川版」首里古地図に描かれている諸事象のうちで、まず道路についての検討をすることとした。具体的な作業過程としては、国土地理院発行の1:10000地形図⁹⁾に記載されている道路のうちで城下町当時にまで溯り得るものを図上で拾いだしていった。その結果、予想していた以上に残存度の高い可能性のあることが判明した。あくまでも図面を一見した枠内でのことではあるが、城下町当時の主要な道路の相当部分が現在も継承されているらしいことが認められるのである。

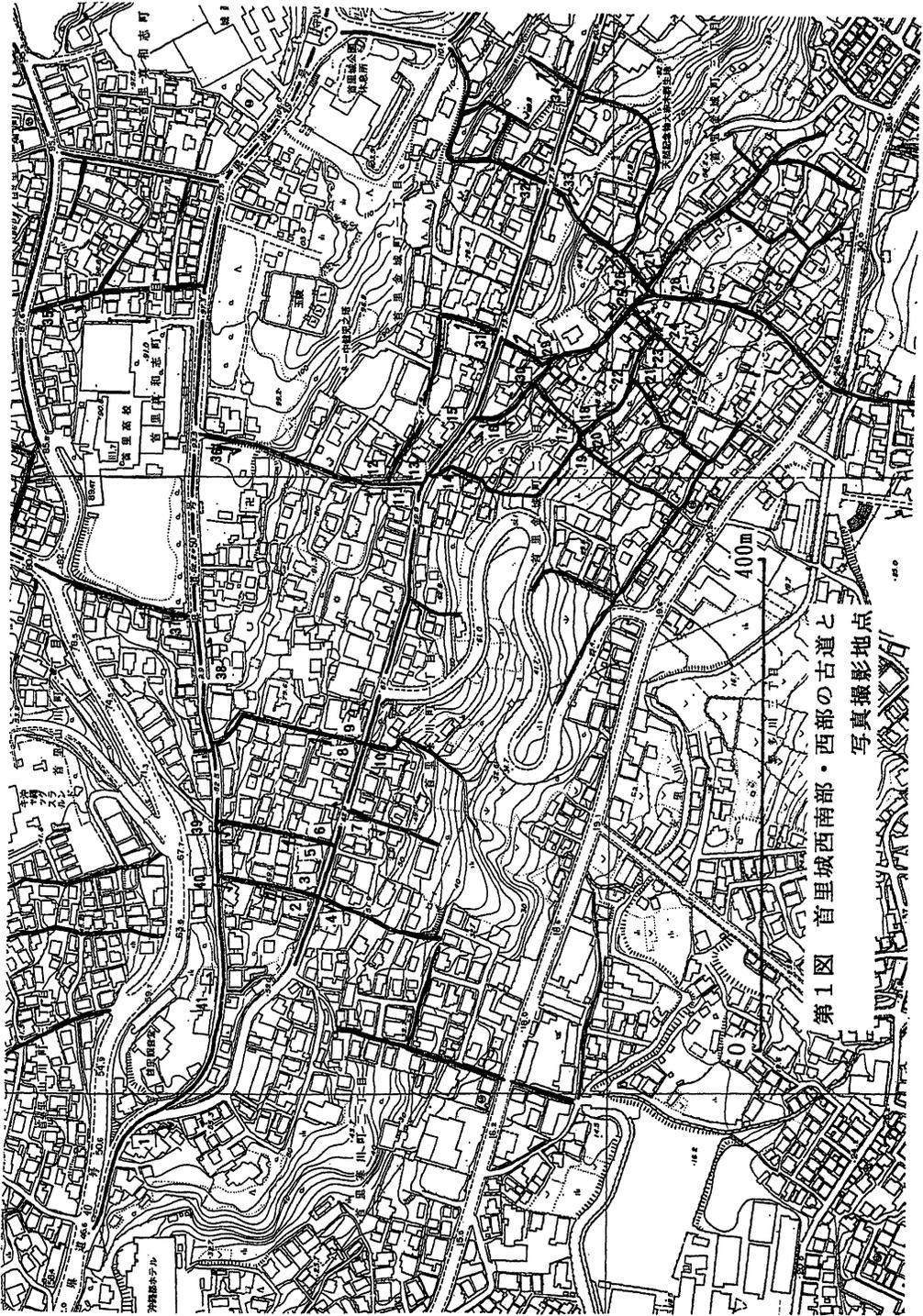
試みに「田名・吉川版」首里古地図に記載されている道路について、道路の交差点から次の交差点に至るまでを1本（したがって仮に4辺形でその各々の頂点が交差点であればその区画は4本の道路で囲まれているとする）、交差点から発して行止まりの道路の場合も1本というように数えれば、約550本の道路が記載されていることになった。もっともここでいう本数は、辺数と表現する方が適当かもしれないし、また数え方によってはかなりの相違もありうる。したがってあくまでも概数でしかない。これに対して、現行の1:10000地形図で認められる城下町当時にまで溯り得る道路は、「田名・吉川版」首里古地図の交差点を基準として数えれば、約380本（辺）にも達するのである。距離の計測はなし得なかったが、少なくとも本数（辺数）でいえば、約70%もの残存度ということになる。

この道路残存度の高さは、戦災のことを考えれば、筆者の予想をはるかに上回るものであ

た。もっとも一般的に認められる道路の継承性の高さは、その景観抹消作用の程度にかかわらずきわめて強いと考えるのが適当であるかもしれない。いずれにせよ、次の段階として、現地を調査することによって、1:10000地形図では確認できない道路の探索をも含めて、実際の道路の状況を調査することとした。現地調査は、1999年8月中旬に実施した。

第1図は、首里城西南部と西部の首里金城町・首里寒川町・首里山川町・首里真和志町に残る城下町時代から継続している道路を、那覇市発行の1:2500都市計画図¹⁰⁾上に示したものである(図上の太線)。この地区の地形は西が低く、東に向かって登っている。県道40号と県道50号との分岐点付近と守礼門との水平距離約1kmの間の標高差は約60m、県道40号と県道50号との分岐点付近と天然記念物大赤木群生地北側の道路面との水平距離約1kmの標高差は約44mであってその傾斜はかなり強い。なかでも県道40号から分岐したすぐに県道50号から分岐する写真1-1の地点から首里城の南を経て首里崎山町に通じる道路の南側には急傾斜面がある。その標高差は水平距離わずか250mの間でほぼ50mにも及び、この部分には階段や後述の石畳が目立っている。写真1-1~41は図上に示したポイントから矢印の方向に向けて撮影した道路の状況である。その大部分は現在アスファルトによって舗装されているが、観音堂から守礼門に続く県道50号と観音堂から首里城の南を通して首里崎山町に通じる道路を除けば、その幅員にはさほどの変化は認められないと思われる。その幅員を確定することはできないが、前章で見た『小湾字誌』などによる古集落の道路幅すなわち6, 7, 9あるいは10尺という数値が首里城下町においても一般的ではなかったのかと推定できる。中には観光地として著名な金城町の石畳の道路があるが、その周辺の特に傾斜の著しい道路には各所に石畳の痕跡が部分的に残っている。写真1-1~41のうち、いずれが旧来の景観を色濃くとどめているかについては、必ずしも明確な基準があるわけではないが、少なくとも道路幅員については、写真1-4, 5, 7, 8, 14, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 39, 40が往時のそれを継承しているように思われる。

第2図は、首里城東部の首里赤田町・首里崎山町・首里当蔵町・首里汀良町・首里鳥堀町に残る城下町時代から継続している道路である。この地区の最高所は、首里城内の149.1mであるが、ごくおおまかに言えばこの地点から東南部および北部に向かって下降している。ただ詳細に言えば、首里城正殿南の興禅寺禅堂の北側の道路は東南部に向かって下降するが、首里崎山町1丁目と2丁目の交差点からは北に向かって緩傾斜で下降、主要地方道那覇・糸満線から東部では弁ヶ嶽の方向に向かってかなりの傾斜でもって上昇するというやや複雑な地形を示している。写真2-1~30は、それらの道路の状況である。大部分がアスファルトによって舗装されている点、図中央部を南北走する主要地方道那覇・糸満線や県道40号・29号をはじめとす



第1図 首里城西南部・西部の古道と写真撮影地点



第2図 首里城東部の古道と写真撮影地点

る明らかに拡幅されている道路を除けば、その幅員にはさほどの変化は認められないことは前述の西南部・西部地区と同様である。その原幅員についても先の地区と大きな差はないと考えてよい。一部復原されている石畳の道路（写真2-3）を除けば、本来的な石畳の道路は、この地区では認めることができなかった。旧来の景観のうち、少なくとも道路幅員については、写真2-2, 3, 6, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 15, 20, 21, 22, 23, 27, 28, 30が往時のそれを継承しているように思われる。

第3図は、首里城北部の首里大中町・首里当蔵町・首里桃園町・首里饒保町・首里赤平町の例である。この地区は、南方の首里城付近から総体的には北に向かって下降しているが、主要地方道那覇・糸満線から東北部では再びその標高を上げる。写真3-1~22は、それらの道路の状況である。大部分がアスファルトによって舗装されている点、主要地方道那覇・糸満線や県道28号をはじめとする明らかに拡幅されている道路を除けば、その幅員にはさほどの変化は認められないことは前述の西南部・西部地区や東部地区と同様である。その原幅員についても先の地区と大きな差はないと考えてよい。本来的な石畳の道路は、この地区では認めることができなかった。旧来の景観のうち、少なくとも道路幅員については、写真3-1, 2, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 13, 14, 18, 19, 21, 22が往時の状況を濃厚に残しているように思われる。¹¹⁾

城下町時代の首里の道路を実地に検証した結果、現在の首里市街地においては、このようにかつての歴史的な伝統をその根本にとどめている道路が、きわめて多く残存していることが判明した。もちろん道路の両脇の住宅などはかつての景観とはもとより異なる。しかし、後述するように、現在の宅地割にも近世の地割がそのまま継承されている例が多い。このことを含めて言うならば、首里城下町の歴史的景観の保全にいつそうの努力が傾注されるべきであると言っておくであろう。

（2） 「首里古地図」と首里城下町の復原

現地調査によって、現在もなお首里市街地には、近世当時の道路の多くが継承・残存していることが確認できた。そこで引き続いて「首里古地図」の現地比定を試みることにした。先述のように、首里城下町の景観を描いたものとしては、東恩納版「首里古地図」、嘉手納版「首里古地図」をはじめ、それをさらに精密化した「田名・吉川版」首里古地図と首里城下町復原模型がある。それらはともに貴重なものではあるが、現行の大縮尺地形図をもとにして作製されたものではない。要するに現地表面の上に厳密に比定されたものではない。したがって、嘉手納氏が述べられたように「各屋敷その他の面積に誤差を生じている。」かつまた「この縮図



は各屋敷の図積を詮索する上からは価値はない」ものである。さらに嘉手納氏の「ただ各事物の位置はほぼ正確に示してある。」という言葉も、厳密に言うならば、やはり多少の誤差があることを否定できない。これは嘉手納版のみについてのみのことではなく、東恩納版・「田名・吉川版」さらに復原模型のいずれにおいても共通する欠点であると言わざるを得ないからである。今までに「首里古地図」を筆者の目指すような大縮尺の地形図の上に現地比定した例があるか否かについては、那覇市役所文化局の田名真之氏・外間政明氏および「国建」の福島清氏に確認した。それによれば少なくとも1:2500レベルの現地比定図は作製されていないとのことである。

現地比定の具体的な手順としては、まず那覇市役所発行の「1:10000 那覇市全図」¹²⁾および「1:2500 都市計画図」¹³⁾を収集し、このうち1:2500都市計画図上に、主として「田名・吉川版」首里古地図に記載されている道路・地筆（宅地割および水田などの地筆）界線・河川などを比定・記入していくという方法を採用した。この際、「那覇市旧跡・歴史的地名地図」¹⁴⁾、「旧首里の歴史・民俗地図」¹⁵⁾、『首里城周辺史跡マップ』¹⁶⁾、「戦前の民俗地図」¹⁷⁾などを参考にした。

一連の作業の結果をあらわしたものが、第4図である。太い実線は城下町当時から現在にまで継承されている道路であり、これに対して、すでに消滅してしまった城下町時代の道路（すなわち古地図には記載されているが現在は存在しない道路）は太い点線で表現している。また細かい実線は屋敷割（宅地割）の界線と農地などの地筆界線であり、水田・畠・林・岩山については各々記号で示している。ただ古地図に記載されている空地・井戸などについては繁雑を避けるために第4図では省略した。

さらにこの第4図のうちで「田名・吉川版」首里古地図に記載されている事象のみを取り出してトレースしたものが第5図である。ただし第4図とは違って、道路については現存するか否かの区別はしていない。要するに「田名・吉川版」首里古地図に描かれている道路を記載してあるわけで、第4図の太い実線と太い点線を共に太い実線で表現したものである。また河川や屋敷界線・地筆界線のほかに、橋、空地、水田、畠、林、岩・岩山、湧水口、井戸、門はそれぞれ記号でもって表記した。

第4図と第5図の作成に当たっては、前述の現地調査によって確認し得た道路を基準にして、まず道路を記入していわゆる街区を確定した上で、その街区内部の屋敷割もしくは地筆割を比定していった。その作業過程において、道路はもとより街区内部の地割の相当部分がかつての地割を踏襲していることがわかった。特に城下町地区の屋敷に関しては、現在もなお宅地の境界線（宅地境界線、小水路など）として継承されている場合が多く、それらの明らかに近世にまで溯り得る境界線を基準にすることによって、かなりの蓋然性をもった屋敷界線を引くこ

とができた。ただ、中には例えば主要地方道那覇・糸満線や県道28号のように、近世時の道路を基本的には継承しているものの道路幅員が極端に拡幅されている場合は、基準とした復原道路の線が必ずしも明確でないために推定街区そのものが実際とは歪んでいると考えざるを得ない場合が生じている。したがって作成した二図の屋敷界線の全てが完全に正確なものであるとは残念ながら言えない。また城下町周縁部に存在する屋敷以外の土地利用すなわち水田・畠・林・岩山などの地筆については基準とすべき道路や地筆界線が少なく、さらに城下町北部と南部の河川流路についても変化している可能性がある。それゆえ、屋敷地区に比較すればこれらの地筆の精密度は相当程度落ちると言わざるを得ない。現に筆者の作成した第4図・第5図における該当部分は従来の「首里古地図」に描かれている状況とかなり異なっている部分も見られるのである。ただこれらの水田・畠・林・岩山や河川は「首里古地図」の周縁部に描かれている場合が多いゆえに、両者のずれは、筆者の現地比定の錯誤ではなく、部分的には古地図そのものの歪みに帰せられる場合もあると解釈することも可能である。

筆者作成の上記二図については、このようにやや曖昧な弁解がましいことを書かざるを得ないが、しかし、従来の首里古地図や首里城下町の復原模型に比べれば、少なくとも現地表面の道路や地割との整合性は格段に優れているといってもいいであろう。

次に試みに「田名・吉川版」¹⁸⁾首里古地図と第5図の縮尺を同一にして両者を比較してみると、興味深い事実が判明した。両者を重ね合せると図そのものの大きさは、ほぼ同じである。筆者作成の図は1:2500都市計画図をベースにしたものであるから当然のことながら距離などに関しては古地図よりは正確であるが、その東西の距離は約2.7km、南北は約1.5kmである。これに対して、「田名・吉川版」首里古地図の場合も現地の描点で計測すると筆者の図と同じ東西・南北間の距離である。ということは、最初に基礎になっている東恩納版「首里古地図」の作成時において城下町全体もしくは古地図に記載されている範囲全体の実測はかなりの精度で実施された可能性を物語る。もっとも「田名・吉川版」首里古地図の縮尺は吉川氏による縮尺で、おそらく氏が現行の地形図上から割り出された縮尺であるから、このことをもって古地図そのものの精度の高さであるという理論的根拠にはなり得ない。しかし、総体として見れば、古地図の範囲と筆者作成の図の範囲の共通性などからすれば、従来の古地図作成時に高い精度で全体の範囲の実測がなされた可能性は高い。先にも述べたように首里城下町はかなりの起伏をもっているが、城下町全体の規模の実測に際しては、水平的な距離を正確に計測する技術が存在していたことが推定できるのである。

にもかかわらず、両者を比較すると、図の全面にわたって相当の歪みが認められる。この歪みは、少なくとも屋敷地区に関しては、例えば首里城付近では軽微な歪みで、その周辺部にい

くほど大きくなるというような歪みではない。(もっとも先述のように周辺の水田・畠・林・岩山についてはかなりの歪みが存在する)。要するに屋敷地区に関する限り、歪みにおける統一的な傾向が認められないのである。ところが全面に歪みが認められるとは言っても、局部的に比較してみると、実はその歪みの程度はごく軽微なものであることも事実である。単一の街区ごとに重ね合わせてみると、両者のずれはそれほど大きくはない。このことから一つの推定が成り立ち得るように思われる。すなわち城下町全体としては、前記のようにかなり高い精度で実測がなされたが、城下町内部の実測は全体の測量とは別に各街区ごとに実施された。この街区ごとの実測は水平的な長さを測量するのではなく、傾斜に沿って現実の地表面を重視して実測された。したがって個別的にみれば街区や屋敷割の実測は相当の精度を得ることができたが、傾斜による微妙なずれが全体の城下町古地図に当てはめる場合に表面化せざるを得なかったというように考えたい。

この点に関しては、例えば歴史地理学で多用する地籍図による作業過程を思い起こすことが参考になるのではないか。換言すれば、大字全図と小字ごとの字図もしくは字限図あるいは切図の違いと言ってよいかもしれない。すなわち全村の範囲が描かれている地籍図(村絵図)の場合は、現行の1:2500都市計画図上に比定してもさほどの歪みは感じられない。それに対して、小字ごとの字図(字限図、切図)を資料として全体を復原する場合、それぞれの小字図はそれなりに現実の道路・畦畔や地割と大局的には整合しているが、厳密に測量された(すなわち水平的距離の整合した)都市計画図と比較すれば、その各々には微妙な歪みが存在するわけで、それゆえに全体に集約すれば、どうしても図の各箇所歪みやずれが生じてしまう。このことを想起すれば、「首里古地図」についての筆者の推定はあながち的はずれではないように思えるのである。

(3) 首里城下町のプラン

「首里古地図」の現地比定と首里城下町の復原という所期の目標は、一応は果たし得たが、あわせてその結果判明しつつある首里城下町のプランについての予察的考察を試みておきたい。

首里城や首里城下町において風水思想が意識されていたことはまちがいが無い。先に吉川氏による考えを記したが、首里城研究グループもまた次のように述べる¹⁹⁾。琉球屈指の宰相の蔡温が中国の福州に留学し風水を学んで帰ったのは1708年以降のことで、1713年に彼は首里城や玉陵などの風水について「…玉陵を覩るに、国都の高処に発祖し、最も好し。城中に竜泉有り、…虎瀬より末吉に至る一連の山林、隠々として穴を護り、且、穴前平坦なり。…」(『球陽』)

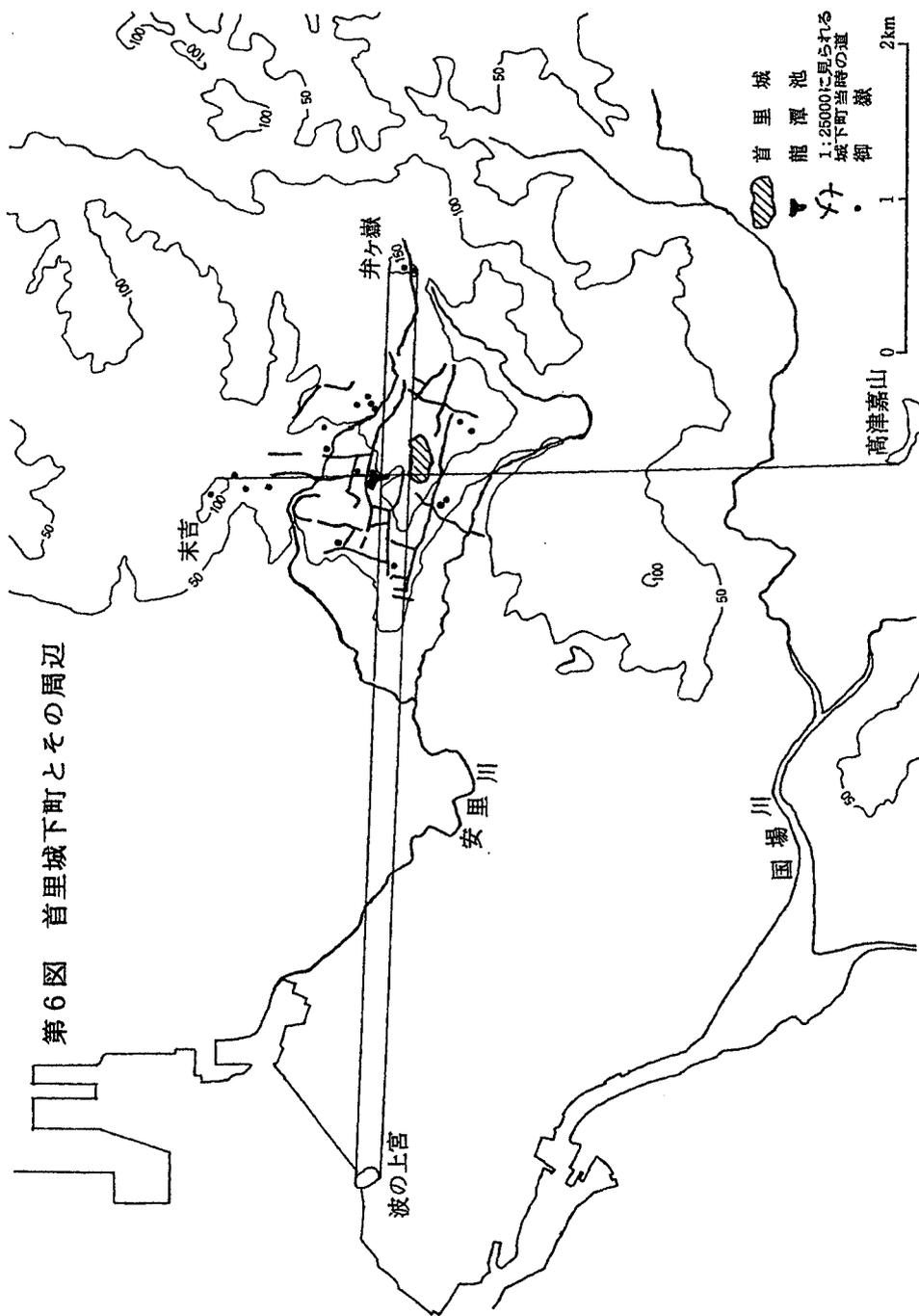
というように首里城は優れた風水の立地にあるとされていた。朝鮮の祖宗山と同じように、首里城も後方に弁ヶ嶽を負い、左右に丘陵を持ち、前面に平地流水を臨み、山の中から流れる流水を抱えている。中央の穴部分は生気が最も集中している場所で、ここに首里城が築城されているというわけである。

筆者もまた、吉川氏や首里城研究グループと同様に、首里城や首里城下町において風水思想が強く意識されていたと考えたい。ただ吉川氏による「首里城は風水思想にもとづいて作られはしなかったかもしれないが、それによっていわば読みかえられたのである。」という表現には若干の疑問がある²⁰⁾。

首里城や首里城下町の建設に際しては、当初から風水思想が強く意識されていたのではないかと考えたい。要するに吉川氏の言われる以上に、風水思想の影響を積極的に想定できるのではないか。第6図は1:25000地形図「那覇」図幅から50・100・150mの等高線をひろいだし、地形図上に記載された首里城下町の当時の道路のほか首里城・龍潭池・御嶽などを記入したものである。一見すれば明らかのように、首里城は100mの等高線の状況から見て、北東部および東部から張り出している台地状地形（いわゆる首里台地）の先端に位置している。これは例えば大坂城などの立地と同様で、戦略的に優れた地点が選ばれたことを示している。

しかし、単に戦略的見地のみが優先されたのではない。弁ヶ嶽、末吉東南方の100m等高線に囲まれた小丘、50m等高線に囲まれた高津嘉山の3丘と那覇の波の上宮の4ポイントはかなり重要なポイントとしての意味を持っているように思われる。すなわち末吉東南方の100m等高線に囲まれた小丘と50m等高線に囲まれた高津嘉山を結ぶ直線と、弁ヶ嶽と波の上宮を結ぶ直線は、首里城・龍潭池・玉陵の集中する城下町中心部で交わっている。末吉東南方の100m等高線に囲まれた小丘と50m等高線に囲まれた高津嘉山間の距離は約4.5km、弁ヶ嶽と波の上宮の距離は約6kmで、波の上宮と2線の交点の距離は約4.5km、末吉東南方の小丘と首里城西北コーナーの距離は約1.5km、首里城西北コーナーと弁ヶ嶽の距離は約1.5kmである。ここで述べる距離そのものに過大な意味を強調することはできないが、何とせよ2直線の交点の有している意味は無視できないと考えたい。水源を首里城内の湧水にもつ龍潭池は尚巴志王時代の1427年に掘られたと伝えられるが、いわば人工池である龍潭池の掘削に際しても、基準としての4ポイントの交点が意識されたと考えることはあながち暴論ではないのではないか。あえて言えば、龍脈の通じる聖なる場所としての意識があったのではないか。

さらにまた、首里城下町の建設に当たって、四神相応という意識が存在した可能性も高いと考えたい。早急に結論づけることはつつしみたいが、中でも玄武としての弁ヶ嶽、朱雀としての波の上宮と周辺海と低地は蓋然性がかなり高いように思われる。末吉東南方の小丘と高津



第6図 首里城下町とその周辺

嘉山については、この兩者よりも可能性としてはやや弱いものの、一応は白虎と青龍というように想定しておきたい。もとより、四神については先述のように弁ヶ嶽、雨乞嶽と急崖・河川、虎頭山、那覇という考え方もあって、ここで筆者が想定する四神がはたして正しいのか否かはなお検討する必要があるが、いずれにせよ通常の四神配置とは方角の点で90度時計回りの方角に転じた四神の配置が意識されていたと考えてもさほど大過はないであろう。(なお野間晴雄氏は、玄武を東の弁ヶ嶽とすることに関して、東を上位とする琉球の方位観が反映していると²¹⁾している)。首里城下町の北部と南部を取り囲んで西方に流れる河川は、ともに玄武である聖地の弁ヶ嶽から流れ下っている。このような状況は、四神相応の地で風水思想にもかない、まさに気の集中する地点に王城と主要施設が置かれたことを物語っているのではあるまいか。

ついで首里城下町は吉川氏の指摘されるように、確かに多核的なプランを有している。この点に関して吉川氏は前記したように、御嶽の分布と周辺の地形からして、沖縄の伝統的な集落の存在として位置づけ、複数の集落の連合は、古地図に見られる街路パターンに認められる多核的な都市形態に通じるもので、その多核的な都市構造は石灰岩台地の地形に立地することによる水の分布に由来する²²⁾というように考えられる。

しかしこの多核的都市プランについて、筆者は吉川氏とは若干異なる見解を持つ。すなわち、第5図や第6図を見れば、首里城下町が多核的な構造を持っていることは疑い得ない。それはいわば円形と方形との混在であると表現することもできる。例えば首里城の西南部(第1図の範囲にはほぼ相当する範囲)では方形プランが一部に認められる。それに対して、首里当蔵町1丁目・2丁目・首里大中町1丁目・首里池端町・首里真和志町2丁目に広がる大きな円形プランをはじめとして、首里桃原町1丁目・2丁目、首里山川町1丁目、首里儀保町1丁目・2丁目、首里汀良町1丁目、首里赤田町1丁目・2丁目・首里崎山町1丁目・2丁目、首里鳥堀町2丁目・3丁目、などには円形プランとでも表現せざるを得ない道路や街区の集合体が存在している。まさに複数の集落とでも言い得るものであるが、吉川氏の指摘のように水の分布に由来するとは一概にはいいきれない。第5図に井戸や湧水口を示しているが、その分布とここでいう複数の円形・方形が必ずしも完全に整合はしていないのである。むしろこれら多核的プランについては、地形の起伏によるところが多いのではないか。例えば首里当蔵町1丁目・2丁目・首里大中町1丁目・首里池端町・首里真和志町2丁目に広がる大きな円形プランは1:2500都市計画図に示された等高線や標高点からみれば80~100mの平坦面といってもさしつかえない緩傾斜面である。また首里桃原町1丁目・2丁目の円形プランも70~80mの平坦面上に見られる。首里城そのものが最高点の149.1mを含む標高110ないし120m以上の平坦面であることを考え合わせると、少なくとも複雑な多核構造は、主として地形の起伏に由来していると

考えるのが妥当であろう。もちろん起伏というきわめて地形的な条件によるものであるから、吉川氏の言われる井戸や湧水の分布と深く関わっているであろうことを全面的に否定しているわけではなく、地形と湧水は不即不離の関係である以上、水の分布は重要な要素ではある。

また御嶽の分布とこれらの多核的プランの関連については、直接的な結び付きを見出さずとは困難である。むしろ御嶽の分布に関しては、第6図に示したように、首里城を中心としてその周辺を取り囲むかのような在り様が強調されるべきではないか。弁ヶ嶽は特殊な御嶽として除外するとしても、多くの御嶽が城下町の周縁部に近い所に立地していることは、かなり重要な意味を持っていると推定することができる。

敢えて言えば、円形のプランに中国の影響を想定することも可能性としてはあるかもしれない。那覇の4町に割り込むような久米村は、中国福建省の三十六姓人の居留地で「唐営」と呼ばれていたことはすでに周知の事実である。したがって琉球と中国特に福建省との繋がりはきわめて強いものであった。試みに福州の唐時代の都邑を見れば、円形の形態を有している。方形プランの卓越する日本の歴史的都市の中における円形の希薄さを考えれば、首里城下町内部の円形には、あるいはこれら中国の都市の影響が潜んでいるのかもしれない。また中国の影響と言えば、周礼型都市という概念が意識されたことも考えられるかもしれない。先に述べた首里当蔵町1丁目・2丁目・首里大中町1丁目・首里池端町・首里真和志町2丁目に広がる大きな円形は龍潭池をはじめとする重要な施設が置かれていたわけでこれに加えて最も重要な中心としての首里城をあわせた地区が、都城の中心に位置し、それを取り巻いて都市が建設されている状況や、玉陵や首里城内部の東ノアサナなどの存在、城下町の西南部や東南部に一部認められる直交状街路などは、周礼型都市を彷彿とさせるのである。しかし、このことの詳細な検証は本稿では成し得なかった。したがってここでは、可能性としての予察を述べておくにとどめたい。

いずれにせよ、この多核的構造は、首里城下町の成立を考える上で、非常に大きい意味を有していることは確実であろう。首里城下町の建設に当たっては、全体計画とでも称すべき大方針は、もちろん存在したであろう。このことは先述した如く、四神の配置や風水思想の影響、さらには想定しうるかもしれない周礼型都市ということをあわせ考えればきわめて蓋然性に富む。ところが一方では、全体計画としての統一性が欠如していることもまた事実である。「首里古地図」の作製における「城下町全体の規模の実測」と「全体の測量とは別に各街区ごとに実施された城下町内部の実測」という両面性を想起させるかのような現象であると言ってよいかもしれない。首里城下町建設に際して実施された按司屋敷の集住単位を検討することが問題解明の鍵であるように思われるが、これについても後日を期したい。

〔注および参考文献〕

- 1) 久手堅憲夫「沖縄の城と城下町」, 『地図情報 Vol.12-No. 1, 財団法人地図情報センター, 1992年6月1日, p.26-30。また沖縄のグスクに関する研究は多いが, 地理学分野からの研究例としては, 出田和久・戸祭由美夫・野間晴雄・山近久美子・佐野静代「沖縄のグスクとその空間配置に関する若干の検討」, 戸祭由美夫『科学研究費補助金研究成果報告書 ユーラシアにおける都市圏郭の成立と系譜に関する比較地誌学的研究』, 1998年3月, p.41-62 などがある。
- 2) 土本俊和「首里の町と首里城」, 高橋康夫ほか編『図集 日本都市史』所収, 東京大学出版会, 1993年9月10日, p.184・185
- 3) 池野茂「沖縄の都市」, 豊田武ほか編『講座 日本の封建都市(3)』所収, 文一総合出版, 1981年, p.631-653
池野茂「首里」, 藤岡謙二郎編『城下町とその変貌』所収, 柳原書店, 1983年10月20日, p.446-460
- 4) 嘉手納宗徳作図・解説, 「首里古地図 (1700年ごろ)」 p.64-65, 「王都首里の町並み分布」 p.133, 『沖縄歴史地図』所収, 柏書房, 1983年
- 5) 前掲4)
- 6) 吉川博也「田名・吉川版」首里古地図の作成について」, 吉川博也『那覇の空間構造 沖縄らしさを求めて』, 沖縄タイムス社, 1989年6月30日, p.214-224
- 7) 吉川博也「聖なる首里, 俗なる那覇」, 吉川博也『那覇の空間構造 沖縄らしさを求めて』, 沖縄タイムス社, 1989年6月30日, p.138-170
- 8) 福島清ほか「首里古地図」と町並み (首里城下町復原模型作製のための研究会資料), 1997年10月9日, 正式の刊行物ではなくA4版で10p.のもの。概略を記した刊行物としては, 福島清「古地図からみる首里の町」, 『首里城友の会会報』No.22 などがある。なお本資料の紹介については株式会社「国建」地域計画部部長福島清氏の了解を得た。
- 9) 国土地理院 1:10000 地形図「那覇」, 1991年編集・1997年修正, 1998年6月1日発行
- 10) 那覇市「1:2500 都市計画図」, 那覇市, 1985年3月作成・1995年12月修正 (1993年8月撮影空中写真, 1995年現地調査)
- 11) なお写真の全ては, 焦点距離を28mmに設定して撮影した。したがって各々の写真上の道路の幅員などは相対的に比較することが可能である。
- 12) 那覇市「1:10000 那覇市全図」, 那覇市都市計画部都市計画課, 1996年3月
- 13) 前掲10)
- 14) 那覇市文化局歴史資料室「那覇市旧跡・歴史的地名地図」(1:6000, 那覇・首里・真和志・小祿地区, 4葉), 1998年3月
- 15) 那覇市史編集室「旧首里の歴史・民俗地図」(1:8500), 1978年12月。
- 16) 財団法人海洋博覧会記念公園管理財団『首里城周辺史跡マップ』, 1997年3月31日, p.1-104
- 17) 那覇市文化局歴史資料室所蔵の「戦前の民俗地図」, (勝連盛重・渡久地朝恒・石嶺伝幸「戦前昭和5年の寒川町民俗地図」(1976.9.21), 大山盛幸・大城孝栄・金城久徳・国吉真栄「戦前昭和8~10年の山川町民俗地図」(1976.3.5), 島袋善恒・石川苗興・島袋盛行「戦前昭和5~6年の真和志町民俗地図」(1976.9.28), 亀谷長祥・真栄城玄明・喜乗貞・伊波盛章「戦前昭和4年頃の池端町民俗地図」(1976.9.30), 久高友章「戦前昭和初期の大中町民俗地図」(1976.9.), 玉代勢孝雄・宮城良長「戦前昭和初期の当之蔵町民俗地図」(1976.9.8), 城間雄蔵・屋嘉比柴信・仲村盛儀「戦前明治20年頃の桃原町民俗地図」(1976.10.23), 長嶺将秀・国吉房俊「戦前昭和4~10年頃の金城町民俗地図」(1976.10.17), 知念紡栄・新垣淑栄・中村竹一「戦前大正初期の赤平町民俗地図」(1976.9.20), 波比嘉宗正・安良城朝貞「戦前昭和初期の久場川町民俗地図」(1976.10.8), 渡嘉敷宗淳・志堅原良明・米須朝

盛・真栄平房敬「戦前大正初期頃の汀良町民俗地図」(1976.12.20), 当間論「戦前昭和7年の赤田町民俗地図」(1976.6.10), 当間論「戦前昭和7年の鳥堀の民俗地図」(1976.6.4), 多和田真惇「戦前昭和8年頃の崎山町民俗地図」(1976.5.26), 末吉安久・渡名喜聰「大正6, 7年頃の儀保の民俗地図」(1976.9.28), 新垣盛福・宮里朝光「戦前大正末年頃の平良町民俗地図」(1976.9.20), 伊佐盛仁「大正初期頃の末吉民俗地図」(1976.9.10), 粟国安栄・屋我昌保・屋宜盛弘・島袋ナエ・諸見里安英・新里紹睦・名嘉山兼得「戦前大正～昭和初の大名町民俗地図」(1976.11.4), 玉城松吉・玉城亮英「戦前明治末期の石嶺町民俗地図」(1976.11.15)。この一連の地図は、第二次世界大戦前(明治・大正・昭和初期)のいわば首里市街地住宅地図とでも称すべき地図である。当時から現地に在住し続けておられた方の記憶によって記録・作製されたもので、筆者が試みたような作業をするには非常に有効な資料であるのみならず、史料としても比類のない重要性を持ったものである。ただ、本稿ではごく一部を参考にし得ただけで全面的には使用することができなかつた。詳細な分析は他日を期すことにし、ここでは資料作製に関わられた方々に敬意を表する意味でお名前を明記しておきたい。

- 18) 「田名・吉川版」首里古地図の縮尺については吉川氏記載の縮尺を利用した。前掲6)

筆者の図の縮尺については1:2500都市計画図をベースにしているから正確である。具体的な作業としては両者をともに1:5000の縮尺に統一して比較検討をした。

- 19) 首里城研究グループ『首里城入門 その建築と歴史』, ひろぎ社, 1997年7月15日, p.1-191のうちp.38・39

- 20) 前掲7)

- 21) 野間晴雄「首里と那覇」, 千田稔『科学研究費補助金研究成果報告書 東アジアにおける歴史的都市の成立と系譜に関する地理学的研究』, 1994年3月, p.44・45

- 22) 前掲7)

〔附記〕

首里城下町の復原模型については株式会社「国建」地域計画部部长福島清氏から懇切なご教示を賜るとともに各種の資料をいただいた。また那覇市役所文化局歴史資料室の田名真之氏・外間政明氏, 財団法人海洋博覧会記念公園管理財団首里城公園管理センターの上江洲安亨氏からも多くの資料とともにご教示をいただいた。さらに那覇市の各種地形図の入手に関しては那覇市役所都市計画課の大嶺政信氏などのご協力を得た。記して深甚なる感謝の意を表したい。